

学生の立場・教師の立場

厚生補導委員 田 嶋 信 雄

数年前、法学部学生が編集・作成するゼミ紹介・教師紹介のためのパンフレットを読んでいて愕然としたことがあった。そのパンフレットは、インタビューに基づいて、教師の生活と意見を身近に感じられるよう工夫が凝らされており、全体として好意的に読まれているようであったが、しかし私が驚いたのは、そのパンフレットの中では、いつも研究室で仕事をしていることで有名な法学部の同僚のN教授について、何と「学生よりも勉強する教授」と紹介されていたのであった（法学部執行委員会編『Sérieux』Vol.3, 1993年11月22日発行、49頁）。

私が愕然としたのは、第一に、この紹介を執筆した学生が、自分達すなわち成城大学学生のことを「よく勉強する存在」として自己イメージしていることであった。これは、率直に言わせてもらえば、私が成城大学学生一般に対して持つイメージとは、いささか異なるものであった。

私が愕然とした第二の理由は、この紹介を書いた学生が、成城大学の教授連に対し、「N教授は特別で、それ以外の教授は学生よりも勉強しない」というイメージを前提としていることであった。私はこのイメージの妥当性に関し、「ウーム」と唸らざるを得ない部分がないでもなかったが、やはり全体としては、教育・研究（つまり勉強）を専業とする大学教師の職業的な日常生活および職業倫理について、学生はまったく何も知らないのだなあと思わざるを得なかった。ありていにいって、「学生よりも勉強しないような大学教師がいたら大変だよ」というのが偽らざる感想であった。（ちなみに、いま手元にある成城大学学生部発行の1997年度『学生実態調査報告』33頁によると、講義時間を除く1日の勉強時間について、全体の約50%の学生が「30分未満」と答えたという。教師はそれ以下ということか。トホホ。）

いまここで、教師の側の学生イメージないし学生の側の教師イメージが、それ自体として妥当であるか否かは問題ではない。これらのことは、要するに、学生と教師が、お互いの日常生活のことをあまり理解して

いないのだということを示しているように私には思えたのである。

もちろん、学生と教師はまったく異なる社会環境の下にある存在であるから、いまさらお互いのことを理解できていなくても、大学という制度（アンシュタルト）さえしっかりしていれば、別にそれでかまわないのだという意見もありうるし、実際私はそうした考えにかなりのシンパシーを感じる時もある。昨今の世の中には、学生の生活に介入しすぎてセクハラまがいのことをする大学教師もいるらしいから、なおさらであろう。しかし、やはり、「教師と学生はお互いの生活を知らなくてもよいのだ」と言いきってしまうと、どこか虚しい気持ちに襲われることがあるのも確かなのである。

お互いの立場の相違を前提としつつ、相手の生活や意見にも一応しかるべき理解を差し延べておくこと。陳腐ではあるが、結局はこうした常識的な結論に落ち着くのであろう。そして、教育が教育である以上、教える者と教えられる者との関係において、権力的な契機が極小化されるべきだということも、改めて言うまでもないだろう。

さて、試験の話である。いま見てきたように、教師と学生は立場が違うのであるから、学生諸君は、たとえば「先生は心にやましい事はありますか？」などとはゆめゆめ尋ねてはならないのである。そして、この試験の場においても私は権力的な契機を極小化したいと切に願っているのであるから、学生諸君には、こうした教師の立場を理解したうえで試験に臨んで欲しいと強く希望しているのである。

試験が終われば、お互いにまた希望に満ちた日々が待っている。学生諸君はサークル活動にまた読書や旅行に（あるいは教師のまったく与り知らない別の楽しみに）、我々教師は研究三昧に（あるいは学生諸君のまったく与り知らない別の楽しみに）。

※法学部教授「国際政治史」担当

